

## 東南アジア地域研究 原洋之介

- ①石井米雄編 (1975)『タイ国——ひとつの稲作社会』創文社。
- ②石井米雄・桜井由躬雄 (1985)『東南アジア世界の形成』講談社。
- ③Cliford Geertz (1963) *Agricultural Involution: The Process of Ecological Change in Indonesia*, Berkeley: University of California (『インボリューション——内に向かう発展』池本幸生訳、NTT 出版、2001年)。
- ④Benedict Anderson (1991) *Imagined Communities: Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, Revised Edition, Verso Editions and NLB (『増補 想像の共同体』白石さや・白石隆訳、NTT 出版、1997年)。
- ⑤飯島茂編 (1979)『アジア文明の原像』日本放送出版協会。

一九六〇年代後半に長いインドネシアでの研究生  
活を終えて帰国してみると、ワシントンの外交官・  
役人たちがアメリカ外交の柱として「低開発国への  
支援」を尊大な口調で語っていた。その語り口を聞  
いているうちに、この「低開発」という言葉がかげ  
がえのない歴史・文化をもつアジア・アフリカの  
新興国民すべてを「経済的におくれた国民」という  
性質しかもたない粗石のあつまりにおとしめている  
感じがして、大層腹立たしかった。

以上は、アメリカの東南アジア研究者ベネディクト・  
アンダーソンが『言葉と権力——インドネシアの政治文  
化探求』(日本エディタースクール出版部、一九九五年)  
の序文に書き記している文章である。経済学という分野  
から東南アジアに興味をもって地域研究に足を踏み入れ  
た私にとって、アンダーソンのこの言葉は、大層深刻な  
問題提起であり、かつ自らが課題と定めた地域研究とは  
いかなるものであるべきかを考えるとき、本質的ともい  
える重要な論点を示唆してくれている。端的にいうと、  
経済学だけからの東南アジア経済論は、先進国からは遅  
れた「低開発国」ないしもう少し新しい概念でいうと  
「発展途上地域」であるという議論でしかない。そのた  
めであるう、前世紀末に東南アジア地域を突然襲った経

済危機に際して、経済学はこれらの地域の経済政策・制度がグローバル・スタンダードから大きく外れていたから危機に見舞われたといった発言しか出てこなかったのである。経済に限定しても、東南アジア、そのなかの個別の国々には、その歴史や文化の個性に応じた地域的個性が存在している。この当たり前の事実をほとんど気にかけないのが、経済学いやもっと正確にいうと、現在アメリカの学会を軸として作られている「新古典派ないし新自由主義学派の経済学」なのである。基本的には「金儲け」の仕組みを論じることになる経済の研究においてすら、研究対象に定めた地域の個性にちゃんとした注意を払うことは不可欠のはずである。こうした問題関心をもってきた私が強く刺激され影響された作品、それも五点だけに限定して、東南アジアに関する地域研究の「古典」ともいっていい名著を紹介してみよう。

### 一 生態学を基盤とした地域研究の誕生

ある地域のかげがえのない個性はどこから生まれるのか。その一つが、その地域の生態であろう。日本が生んだ東南アジア地域研究のユニークな特徴は、実は当たり前前のこの論点を正面から取り入れてきたことにある。そして、こういう研究をリードしてきたのは、京都大学東南アジア研究センター（現東南アジア研究所）であったことを強調しておきたい。その代表的研究成果が、①石

### ●リーディング・ガイド

井米雄編『タイ国——ひとつの稲作社会』である。タイの歴史は、山間盆地の井堰灌漑に支えられた古代国家に始まり、中世には古デルタ上の商港アユタヤが栄えた。そして近代以降、プランテーション型の輸出稲作を実現させた新デルタに立地するバンコクが核となった歴史が展開してきた。このような歴史を展開させたタイを対象として、研究所全体での研究プログラムを組織化し、現地での臨場研究を軸としながら、生態研究と人文・社会研究の総合を目指して進められたタイ研究プロジェクトの成果である。

タイの歴史の核であり続けた稲作は、タイ一国内でも実に多様である。農作業としての稲作は、その地の地形や水条件、日射時間などに大きく左右される。この事実を基本仮説として、東南アジアの典型的な稲作社会であるタイの歴史展開・社会構造・文化動態を、生態との関わりという統一視点から明らかにしてくれたのが、この作品である。具体的には、山地世界、特にそのなかの谷地田、扇状地型空間、チャオプラヤ河の流域に発達したデルタ、それも上部デルタと下部デルタ、こういう多様な生態区ごとに、水利条件の差異に基づく稲作の多様性だけでなく、この生態基盤の上に展開・形成された、個性的な社会や文化のありよう、そして領域を支配するタイプではない政治の展開、こういったタイの個性ともいってよい事態が見事に析出されている。間違いなく、わ

が国の東南アジア地域研究を代表する現代の古典である。そしてこの研究で提出された、生態学を踏まえた稲作国家論は、東南アジア全体の国家論の再構築へと進化していく。東南アジアに古くから成立した国家とは、一時期日本の学界で盛んに論じられたカール・ウイットフォールが論じたような、多量の奴隷労働を役させる「アジア的専制国家」ないし「水力社会」ではなかった。東南アジアの伝統国家は、ことごとく、ささやかな自然水利を基盤とした小規模な家産制国家でしかなかった。こういった議論が提出されるようになり、この議論が東南アジアという地域を越えて、広く中国、インドといった地域での国家論に再検討を迫ることになったのである。

このタイ研究を補完するものとして、高谷好一『熱帯デルタの農業発展——メナム・デルタの研究』（創文社、一九八二年）も大層重要な作品である。東南アジア研究が生んだ非常に個性的な生態学者である高谷は、タイの歴史を通して核心域であったチャオプラヤ・デルタで集中した実態調査を行っている。このデルタは、古デルタ、氾濫原、新デルタ、そしてデルタの周辺に位置する山麓緩斜部という生態区に区分され、それぞれの生態区での稲作から社会にいたる詳細なフィールド・ノートともいえるのが、この作品である。思い出すと、この本が出版された直後、私はそれを道案内として友人とタイのデルタを車で走ったこともある。この詳細な学術書は、その

#### リーディング・ガイド●

後高谷本人によって『コメをどう捉えるのか』（NHKブックス、一九九〇年）として、一般向けの書物として公刊されていることも紹介しておこう。

#### 二 外文明との接触を通しての個性的内世界の形成史

生態という地域の個性を規定する自然環境を正面から取り入れることが、どういう切れ味つまり新しい視点から人文・社会研究に持ち込みうるのか。この疑問に歴史学の領域での確に答えてくれる代表的作品が、②石井米雄・桜井由躬雄『東南アジア世界の形成』である。東南アジアは、ユーラシア大陸が東南に突き出た大きな半島部と、それとは物理的には離れながらも文化的にはつながっている島嶼部とから成り立っている。この東南アジアの生態は、アルプス造山運動の結果生まれた山地、平原、河川とその流域、そして赤道を中心として存在している海と大きく区分できる。この生態こそが、ユーラシア大陸の東南の半島部とその南に広がる多くの島嶼における歴史展開を規定してきた。この歴史過程を、巧みに描き出してくれたのがこの作品である。浅い大陸棚の海とあちこちに点在する島々、そして山地世界の窪みといえる盆地をつなぐ陸路、これらが古い時代から交通路・交易路のルートとなっていた。そしてまた、このような多様な生態区が生みだした特産物の存在が、一見すると孤立していたかに思える東南アジア地域の各地を古

くからつないでいた。大陸部東南アジアともよばれる大きな半島部の山間盆地には、プラないしムアンと呼ばれる小さな国家が成立していたし、また島嶼部東南アジアとよばれる海域世界には、船の航路に面したネガラ、ヌガラと呼ばれるこれまた小型の国家が共存していた。さらに、東南アジアは赤道が通る熱帯のなかで唯一の海が支配的な地域であることもあって、この地が生み出す特産物は、中国、インドという隣接する巨大文明の地域だけでなく、ヨーロッパまで含めた世界からも注目され、また欲しがられた。このため、各地の小型国家・社会も決して孤立した閉鎖空間ではなかった。そのため、インド、中国だけでなく、イスラームや近代西欧といった「外文明」を受け入れながら、自らがそのなかにある個性的な生態空間に応じた「内世界」を形成してきたのである。東南アジアが地域としてもつこのような独特の歴史過程を他の論者がとても真似のできないほど巧みに描きだしてくれているのが、本書である。わが国での若い世代の東南アジア歴史研究は、現在、間違いなくこの書物が提起した大きな歴史の枠組みのなかで行われている、といってよいであろう。

### 三 生態に規定された異なったタイプの農業発展

少し日本以外の作品を取り上げておこう。第一に取り上げたいのが、アメリカの人類学者であるクリフオー

ド・ギアツのインドネシア研究である。なかでも③『インポリューション——内に向かう発展』に注目しておきたい。

インドネシアの農業は、大きくみると二つの異なったエコ・システムから成り立っている。多様な作物、生物間を移動する栄養素の循環、そしてデリケートな均衡で特徴付けられるスワイデン（焼畑農耕）というエコ・システム。開放的な土地、高度に単一の作物に特化した耕作、水への依存、そして安定的な均衡で特徴付けられるサワ（水田稲作）というエコ・システム。後者がジャワを核とする内インドネシアの農業であるのに対して、ジャワ以外の外インドネシアの島々では前者のタイプの農耕が支配的である。

ギアツは、このサワというエコ・システムが支配的なジャワ、それも東ジャワでの農村調査を踏まえて、この作品を書いている。「内旋」とも日本語訳されることのあるインポリューションとは、いくつかの限定された単位要素が多様な形で組み合わされることで、結果として繊細なところで「複雑化」が留まることなく進むという過程を言い表す概念である。こういう複雑化が、生態的には安定的なサワというエコ・システムのなかで生じたというのが、ギアツの本書での基本的命題である。このインポリューションは、オランダの強制栽培制度と自由企業プランテーションの時代に、増加し続ける人口圧力

### ●リーディング・ガイド

を主要因として、ジャワのサワが内包していた生態的弾力性によって顕在化した。そして「インポリューションは、絶え間なく進んだ、あるいは外にむけて拡大していったというべきだ。なぜなら、当初は砂糖地域において充分に有効であるとみられたこのインポリューションは今やジャワのほぼ全域でみられるからである」。農業のインポリューションとは、ジャワにおける完全とはいえないにしても、間違いなくポスト伝統的な社会過程であった。これがギアツの結論である。より一般的にいうと、東南アジアの社会とは、自然環境と水利用のシステム、その上に乗っている稲作のサイクルを軸とする社会関係、これらがゆるやかではあるが一つに完結したシステムをなしていることを、ギアツの議論は示してくれているのである。

「一九五〇年代に私はふたつのことに好奇心をそそられた。ひとつは、一九世紀から二〇世紀初めにかけて人口が急激に増加したにもかかわらず、ジャワの農村社会は極めて安定的に見えたことであり、もうひとつはほぼ同じ時期における日本の農業発展との対照性であった。日本では農村人口の増加のほとんどすべてを発展しつつある都市部門で吸収していったのに対して、ジャワでは増加する労働力をほとんどすべて伝統的な耕作システムのみで吸収しているように見えた。このプロセスがインポリューションと呼ぶものであり、この言葉は、それ

までおもに芸術の分野で用いられていた文化人類学の確立した概念を借用したものである。／この研究が提示した中心的課題は、なぜこのようなことが起こったのかということである。私の答えは、オランダ植民地支配のもとで発展してきたジャワ独特の搾取のパターンにある。ここでは、おもに砂糖であり、いくらかはコーヒーや茶といった資本集約的な農業は西洋の企業のために留保されていた。これらの企業は増大するジャワ労働者を季節的に雇用することによって、農民経済を膨張させつつもそのままに留めておくことを可能にした」。

以上は、日本語訳によせられたギアツ自身の序からの引用であるが、これにギアツの持っていた問題関心が過不足なく語られている。

「最も一般的な形で表現すれば、本書は、社会人類学の概念と成果を歴史（経済史）の解釈に応用するひとつの試みである」と、原著の序文に記されているように、この作品は、第一次的には人口論を軸とした農業史なのである。そして、ギアツがこの作品を書くきっかけとなったのは、一九五〇年代後半にいたってアメリカの国家戦略の一環として組織されたMIT国際開発センターの経済開発プログラムへの参加であった。その辺の事情は、本書の前書きが、ベンジャミン・ヒギンズというこの時代のアメリカの開発経済学のリーダーによって書かれていることから充分に明らかであろう。ただしギアツ自

身は、ジャワ調査に参加したなかで次第に、形式的論理から踏み出そうとはしない経済学者に不満を募らせていく。その辺の事情は、後に『文化の解釈学』（吉田禎吾ほか訳、岩波書店、一九八七年）としてとりまとめられたいくつかのエッセイを読めば明らかである。いずれにせよ、『インポリューション』はその後インドネシア農業・農村研究だけでなく、東南アジアの農業研究に決定的な影響を与えることになった。この意味で、本書は間違いなく、東南アジア研究の古典なのである。

#### 四 「文化」で地域の個性・核を「括りだす」政治論

人類学に続いて政治研究の領域をみたとき、現在古典という評価を下せるものは、同じくアメリカでの研究成果であるが、ベネディクト・アンダーソンのナショナリズム論、④『増補 想像の共同体』である。

「諸国民の連合、つまり国際連合の時代を生きる我々にとって、国民国家ネーション・ステート——「平等」体なる国民の共同事務機構」というフィクションによって意味づけられる国家——は、政治生活の基本的枠組みとなっており、国民国家に存在論的根拠を与える「国民」は、我々には自明の前提となっている。しかしそれにもかかわらず、国民と国民主義ナショナリズムの概念については、はなはだしい理論的混乱がみられる。それは、たとえば日本語において、ネーションが国民、民族

と、またナショナリズムが国民主義、民族主義、そしてときには国家主義とすら等値されることにただちにみえてしよう。

本書でアンダーソンは、こうした国民概念の混乱のなかで、国民を「想像の（された）共同体」ととらえ、そうした「想像の共同体」が人々の心の中にいかにして生れまた世界に普及するに至ったのか、その世界的過程を、「聖なる共同体」と「王朝」、「メシア的時間」と「空虚で均質な時間」、新しい「巡礼」の旅、「言語学・辞書編纂革命」、「海賊版の作成」などの概念を鍵として解き明かしている。以上は「訳者あとがき」からの引用であるが、これ以上の内容紹介は不要であろう。

「一九七八年二月、一九七九年一月のヴェトナムのカンボジア侵攻と占領が、革命的マルクス主義体制の、革命的マルクス主義体制に対する、最初の大規模な通常戦争であったとすれば、翌二月の中国のヴェトナム攻撃は、この先例をすみやかに追認するものであった。（中略）こう考えてみると、第二次世界大戦以降に成功したすべての革命が、自らを国民的ナショナル用語で規定したこと——中華人民共和国、ヴェトナム社会主義共和国その他——そうすることで、革命前の過去から継承した領土的、社会的空間にみずからを確固として定置してきたこと、こうした事実が浮かびあがってくる」。

以上は、序の書き出しの文章である。ここにアンダー

#### ●リーディング・ガイド

ソンのナシヨナリズム論の基本的問題関心が的確に開示されている。この作品を一読すれば、「東南アジア」という地理的概念が生まれ出した時代に、そのなかの多くの地域で、新しい国家・国民建設に向けてどのような政治や人々の思想の動きがあったのが、実によく理解できる。そして、ナシヨナリズムが形成されてくる歴史過程において、経済利害といった物質的条件だけでなく、いやそれ以上に人々が持つ同胞への共感といった共同体の基盤となる社会心理的・文化的要因が重要であることが見事に解き明かされている。アンダーソンのこの作品は、それ以降東南アジア地域政治の文化主義的研究を大きくリードしていくことになった。この意味で、本書は間違いなく、東南アジア地域研究が生んだ作品なのである。先に紹介したギアツとは、扱った問題は違っているが、二人とも自分たちが生きている時代の問題に実に真摯に対応しながら、地域研究を行い、その成果をこれまた時代状況と関連付けて書いていることを忘れてはならないであろう。

## 五 世界規模での地域間比較の試み

東南アジアとは、世界の他の地域と比較してみたとき、どんな個性を持った地域といえるのであろうか。よく東南アジアとは、インドでなくまた中国でもない「はざまの地域」であるといわれる。そのため、この地域の持つ

## ●リーディング・ガイド

「はざま性」とは具体的にどういうものであるのかを解き明かすことも、東南アジア研究に課された重要な課題となつていく。この大きな問題に取り組んだ、わが国では最初の書物ともいえるのが、⑤飯島茂編『アジア文明の原像』であろう。

この書物は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が主催した「アジア社会の原構造とその変容過程の研究」（一九七四～七六年）プロジェクトの最終まとめとして行われた討論会をベースにしたものである。この討論会には、生態学者、農学者まで含めた多くの東南アジアを専門とする研究者が参加している。彼らと中国・インド研究者とのあいだで戦わされた討論は、まさにアジアの二つの巨大文明、中国・中華世界とインド・ヒンドゥー世界との比較で東南アジアがどういう個性をもった地域であるのかを見事に炙りだす結果となっている。

ユーラシア大陸を見渡した巨視的な生態史からみると、大陸移動でヒマラヤ山系が出現したときでさえあがつた大きな平原が、インドと中国である。この両者のあいだの山の世界が東南アジアである。生態のこのような差異が、デカン高原を核心域とするインドと華北黄土平原を核心域とする中国での畑作文明を、そして山地世界の谷地田での水田稲作を発祥とする東南アジア世界を生みだし、これらがこの三つの地域でのその後の歴史展開を基本的

に規定した。こんな壮大な比較史の構図が、本書では提出されている。このように生態区分によって地域を「わけける」論理に加えて、中国・インドと東南アジアとを「つなぐ」要素の存在も強調されている。モン・クメール系などのオーストロ・アジア系民族によって、インド世界と東南アジアはつながれているし、またアッサムから雲南に住むタイ系民族によって東南アジアと中国とは深くつながっている。こういった本当に刺激的な議論も提出されているのである。ただ惜しまれるのは、東南アジアにも深い影響をもたらしているイスラーム地域との比較が行われていないことである。

「日本におけるアジア論は、つい最近までもつばらマルクスをはじめ、マックス・ウェーバー、ジョルジュ・セデスなど、西欧諸学者による学説の受け売りの傾向が強かったといえよう。しかも、西ヨーロッパにおけるこれらの学説の多くは、実証的というよりは安楽椅子型のものであり、帰納的というよりは演繹的なものであった。(中略)しかしながら、戦後二、三十年にして、ようやくわが国でも自前アジア研究者が輩出してきた。(より多くの文献解説だけでなく、基本的には現地での調査を実施によって)わが国における実証的なアジア研究の芽はしだいに大きくふくらみ、いろいろな分野で今や開花しようとしている」。

編者飯島が「あとがき」にこう書き記している通り、

#### ●リーディング・ガイド

本書は、わが国における本格的アジア研究の成果がどういうものであったのかを端的に表してくれている。

「アジア文明の原像」を巡るシンポジウムをリードした農学者渡部忠世は、その後『稲のアジア史』(全三巻、小学館、一九八七年)をとりまとめている。またもう一人の重要な討論者であった高谷好一は、その後京都大学東南アジア研究センターが核となった重点領域研究「総合的地域研究の手法確立——世界と地域の共存のパラダイムを求めて」において、地域間比較の研究を進め、『世界単位』から世界を見る——地域研究の視座(京都大学学術出版会、一九九六年)を公刊している。まさに東南アジア研究は、対象としている世界の「はざま性」を強く意識してきたために、より広域的スケールでの地域間比較の研究を大きく前進させる原動力になったといえるであろう。

#### 結 地域研究の手法構築に向けて

今から二〇年くらい前に出版された『東南アジア学への招待(上)——新たな認識を求めて』(NHKブックス、一九八三年)の序論に、編著者矢野暢は「東南アジア研究の世界には、すでにいくつかの古典があらわれている」と記している。具体的には、ジョルジュ・セデスの『インド化された国々』、『インドシナ半島の人々』、またハイネ・ゲルデンの『東南アジアにおける国家と



王制の観念」が挙げられていた。この紹介で取り上げた五つの作品は、間違いなく、矢野が挙げたこれらの古典にも充分匹敵する研究成果といえよう。もちろん、主として紙幅の制限から本稿では取り上げえなかった作品もある。その代表が、社会構造論である。「ゆるやかに構造化された社会」論が、東南アジア研究が生みだした忘れることが許されない成果であることには、誰も反対しないであろう。わが国の社会学者、社会人類学者が中心となって東南アジアの社会の観察・分析から生みだした「間柄の論理」とか「二者関係の連鎖」といった社会構造の基本型は、世界規模での比較社会論において、無視できない研究基盤を提供し続けていこう。

今まで紹介してきたように、東南アジア研究は、地域研究に関して生態学を基盤とするという大層独創的な研究方法を生みだしてきた。その手法とは、一言でいって立本成文が『地域研究の問題と方法——社会文化生態力学への試み（増補改訂）』（京都大学学術出版会、一九九九年）で提案している「社会文化生態力学」である。では、なぜ生態学が、東南アジアに関する地域研究において基盤でなければならなかったのか。それは、東南アジアではその個性ある生態に規定された社会形成や歴史発展が生起してきたからである。端的に表現して、東南アジアの自然は、人間の生存を不可能にするほど苛酷ではないが、人間のコントロールを受けつけるほど温和なもので

#### ●ガイド・リーディング

もない。そして、自然は、山、平原、デルタ、海といったように多様なのである。そしてこの事態が、東南アジアの地域としての個性を作り上げてきた。このことを明示的に解明してくれたことにこそ、わが国の東南アジア研究の独創的貢献があったと断言してよいであろう。いうまでもなく、東南アジア以外の地域でも、生態はその地域の歴史や社会、文化に大きな影響を与えてきている。いわゆる自然環境決定論ではない形で、どう生態を地域研究に組み込むのか。この問題にはいまだに共通した見解はないが、生態の取り扱いが地域研究にとっては避けて通れない重大な問題であることは間違いがない。この点でも、わが国の東南アジア地域研究が生みだした「社会文化生態力学」の手法は、優れて現代的な問題提起となっているのである。

（はらようのすけ／東京大学大学院情報学環）